

『東京油田』に懸ける夢

家業、アジアへの旅、環境への思い。廃油回収会社ユーズ社長、染谷ゆみさんに聞いた。
取材／桜井 さやか（早稲田大）

環境があなたをつくり、
あなたが環境をつくる

東武亀戸線小村井駅から徒歩15分。人情溢れる商店街の残る、東京の下町墨田区に、株式会社ユーズはある。最初その建物を見たとき、通り過ぎてしまいそうになった。「廃油回収」「会社」などのイメージとは全く違う外観をしていたからだ。大きなガラス窓、煉瓦模様の壁、かわいらしい看板。玄関を入ると、受付のカウンターの向こうに社員さんの机が並んでいる。開放的で、清潔な雰囲気だ。木の匂いがすると思ったら、併設の古本屋さんの本棚と壁が木製だった。通されたテーブルと椅子も木。なんだか快い空間に、緊張が少しほぐれた。

お話を伺う染谷ゆみさん（30歳）を待つ間、一度玄関の戸が開いた。入ってきたのはおじさん。「油を引き取ってもらえるって聞いたんですけど。」どうやら初めて来るお客さんらしい。口コミで知ったのか。ユーズの知名度は高いようだ。

そして、染谷さんがいらっしゃった。気さくな笑顔の、イキイキとした女性。30歳の若さで、このユーズの社長さんである。私は一目でファンになってしまった。こうして取材は始まった。

ユーズの仕事—てんぷら油で車が走る

ユーズが行っているのは、使い終わった食用油を回収し、93年に自社開発したプラントで、VDF（ベジタブル・ディーゼル・フューエル）という車の燃料にリサイクルすること。

国内の食用油の消費量は年間100万トン。捨てられる廃食油は40万トン。そのうち飲食店や食品関連企業から出される廃食油は回収され肥料や石鹸、塗料などに再生されるが、一般家庭から出る残りの20万トンは生活排水として流され環境破壊の原因となっている。

ユーズはその一般家庭からの廃食油を回収しVDFで車の燃料に変え、系列の染谷商店をはじめガソリンスタンドで販売している。値段は軽油と同じ。でも軽油と違うのは、大気汚染の原因となる硫黄酸化物がゼロ、呼吸器官障害の原因となる黒鉛は三分の一以下。普通のディーゼル車に使える。

さらに、開発したプラント自体も販売している。スタッフは14名。

オフィスの一角には古書店「ユーズの森の本屋」があり、古本を売るだけでなく、お茶を飲めるようにしたり、ギャラリーとして貸したりもしている。さらにはカフェバーの「あぶらや」も経営。味はもちろん、ワインセミナーを開くなどのイベントも人気だ。これらの活動を結んでいるのが「ユーズ・マネー」という交換券の存在である。油か本と引き換

えに発行し（1ユーズ＝10円）金券としてVDF・本の購入、あぶらやでの飲食に使用可能。変わっているのが「森」との交換だ。古本と森の交換事業を行う福島県の会社「たもかく」と提携。167ユーズ（1670円）で福島県只見の森一坪のオーナーになれる。本だけでなく廃油も森になるとというのがユーズならではだろう。

単なるリサイクルに終わらないこれらの活動を提案・実現してきたのが染谷さんだ。まさに天職に思えるけれど、ここまでの道のりは、決してまっすぐな最短ルートではなかった。

家は廃油処理業、しかし

もともと染谷さんの家は50年廃油処理業を営む、染谷商店。飲食店や食品関連の会社で出る大量の廃油を飼料や肥料、石鹸などの原料に再生する仕事をしていた。しかし染谷さんは、祖父が始めたこの家業を継ごうという気は全くなかったという。

「昔から環境問題には興味がありました。今思えば父親の影響なんですけど、当時は家と結び付けて考えたことはなかった。身近すぎたんでしょね」

リサイクル業が「環境ビジネス」として話題にのぼるようになったのは最近の話。自宅の廃油業は「八百屋さんやお風呂屋さんと同じ」単なる家業としてしか映らなかった。そんな染谷さんの転機は高校卒業後に訪れる。机に向かう勉強はもういい。それより、自分の目で世界を見たい。大学受験も就職もせず選んだ道はアジアへの旅だった。

強い自然、弱い人間

中国からスタートし、ネパール、インドへ。この旅で染谷さんは、自然の力と自分の非力さを強く感じたという。中でも忘れられないのは、崖崩れに遭ったことだ。

「ネパールに渡るには山を越えるんですけど、ちょうど雨の多い時期で、足場の悪い中を何とか歩いて町についた時に、大きな岩が転がり落ちてきて。現地の人と一緒に訳も分からず逃げたんですけど、あと少し遅れていたら確実に死んでましたね」

日本では意識することの無い死が、すぐ身近に感じられた。恐さと共に、大きなショックを受けた。

「自然というのは本当に微妙なバランスで成り立っていて、人間はその中で生きているんだなって」。巨大な山があっけらかんと崩れていく。そして崩れてしまったものに対して、人間はなんて無力なのだろう。日本で生きてきた18年間で、全て否定されるような経験だった。

ただでさえ人間は弱く、自然の前では無力になる。それに加えて染谷さんは、「日本人」としての弱さも痛感した。「例えば山歩きにしても、重いリュックを背負いながら、現地の人とはトントントンって、軽々と歩いていく。でも、足を出したら今にも崩れそうな、それこそ『道無き道を歩く』ような状態で、私なんかはふらふらしちゃって、全然進めないわけですよ」

山道を歩くこと、それ自体は、文明社会で生きるには不要な能力かもしれない。それでも、「日本人はね、便利さを求める中で、何か大切なものを忘れてきちゃったんじゃないかって、思わずにいられませんでした」

仕事探し、自分探し

しばらく各国を回った後、帰国。否応無しに、日常生活に引き戻される。どんなに印象的な旅をしても、日本ではただのプータローでしかない。染谷さんは仕事を探し始める。自然の中で人々が力強く生きるアジアを体感して、環境に関わる仕事への思いは一層強まっていた。

しかし当時はまだバブル景気、消費の時代。環境を扱う業種は少ない。理想の職場を探して仕事を転々とする染谷さん。一時は当時駆け出しだった旅行会社のH I Sで働いたこともある。旅の経験が活かせるうえ、同僚とも仲が良く、居心地のよい職場だった。しかし、環境への思いは強く、充分働いたと感じた時にきっぱりとやめた。そしてある時ふと気づく。そういえば、廃油リサイクルって、環境ビジネスそのものじゃないか！

「目からウロコが落ちましたよ。まさに探してたものが、こんなに近くにあったなんて」

迷わず染谷商店に入社。長い回り道の末、油との人生に足を踏み出した。

「いつのまにか」

「時期が良かったんでしょうね」。高校卒業後すぐ家業を継いでいたら、長くは続かなかったかもしれない。回り道が結果的に、興味を育て、絶好のタイミングを生んだ。「でもね、何でもそうだと思うんですよ」。例えば、VDFプラントも「いつのまにか出来ちゃった」。もちろん、実際は様々な努力があった。アメリカで大豆油から燃料を生産していると知ったのが始まり。情報を集め、研究を開始、試作品のテストを繰り返す。簡単なことではな

い。ただ、染谷さんは自分の仕事に誇りと夢を持っていた。理想を実現したくて一生懸命仕事に取り組むうちに、人脈が広がり、協力が増え、不可能が可能となって、気づけばプラントが生まれていた。

「夢って、叶うと思うんですよ。口にしていればね、必ず実現できる時期が来る。私も、ずっと環境を仕事にしたいって言っていたら、最高のタイミングで染谷商店に気づいたし、プラントだって、この仕事が好きで、これが夢なんだってことをいつも言っていたからできたんだと思います」

実現できると信じて、口にしていれば、表現することで夢に近づいていく。

「夢はありますか」染谷さんからの逆インタビュー。普段なら照れてしまうのに、染谷さんの前では自然に話していた。私は児童書の出版をしたい。生きにくいと言われる今の子どもたちが、少しでも生きることを楽しめるように、外側の社会を変えることは難しいけれど、内側の心が読むことで勇気づけられるような、そんな本をたくさん創りたい。

「叶えて下さいね」。にっこり笑って下さった。

「環境を守る」スタンス

私が染谷さんについて、特に魅力的だと思ったのは、彼女の環境に対するスタンスだ。

ひとつには、「楽しんで」環境問題に取り組もうという姿勢。仕事を探して試行錯誤していた時、染谷さんはNGO団体も訪れた。「環境」に関わりたい一心から手伝ったものの、どうしても違和感があったという。

「ああいう利益を生まない運動的なものには、何か矛盾を感じて。『環境を守る』っていう

理念とか、ビジョンを持つのは大切だと思うけれど、それだけなんですよね。具体的なもの、お金やマネジメントがない。そうすると、やってる人が苦しい。はっきり言って、いい世界を作ろうと思ったら、皆が辛い顔をして、長時間労働して、というのじゃだめだと思うんです」

理念だけでは前に進めない。楽しめる現実があって、初めて理想像に近づけるのだ。

地域の小売店が共同して

もうひとつは、「環境は地域から」という考え方だ。染谷さんは自分の住む地域をととても大切にしている。

「やっぱり、町を好きじゃなければ、ゴミ分別なんて誰もしないでしょ」

染谷さんは最近、地元の商店街をインターネット上に開店する企画に参加している（すみだ電子商店街）。下町の人情を全国に発信して、各地域の活性化や人間関係の復活、町興しを促そうという願いとともに、スーパーに押されがちな地元小売店の生き残りも図る。

モットーは、「デジタル上のアナログ商売」だ。「電気屋さんが電球の値段でディスカウントストアと競うのは、正直言って無理があるんですよ。でも、注文を受けて配達して、高い所にある電球を取り替えてあげる。他の部屋もチェックして、切れそうなのがあれば、それも替えてあげる。そこまでやれば定価でもニーズはあると思います」

昔の御用聞きのような密接な、「アナログ」な関係をお客さんと結び、実際の手間はデジタルで省くのだ。

また、ネットで注文、配達という形態には、各店舗に電話注文するのとは違う、新しい効果があると考え。「お酒の注文は普通は酒屋さんにだけ連絡しますよね。でもネットでは

商店街全体がつながるので、ビールと一緒に電球を配達したり、その帰りに油や本を回収したり、共同システムが可能になるんです」。自分の会社の利益だけでは意味が無い。地域を活性化させたい。そんな染谷さんの思いが伝わったのだろう、墨田区では区による廃油回収も始まった。他の自治体への影響を含めて、期待は大きい。

「東京は油田なんですよ」

自分の仕事が好きで、楽しんでいる染谷さん。それでも、女性が廃油回収業をしているという「何でそんな仕事してるの?」と不思議がられることがまだまだあるという。トラックを運転して重い廃油を集めながらふと考える。なぜこの仕事なのか。

「東京って油田なんですよ」染谷さんは笑う。「だからね、夢があるんです。油を掘ってるのと同じ。天ぷら油があれば石油なんて要らないんだから。これは、東京油田開発です」

世界が見たくて海外に出て、自然の力を知って東京に帰ってきた。そして今は地域の環境を考えることで、逆に世界と手をつなごうとしている。無理はせず、夢を大切に、自分に正直に、そして楽しんで。染谷さんが教えてくれたのは、つまりはそういうことだと思う。

アジアでもらったパワーを自分に最も近い場所で生かすことを選んだ染谷さんのように、染谷さんにもらったパワーを、私は私のすぐ傍にある世界のために使っていきたい。いつかそれが染谷さんの世界とつながって、どんどん広がっていくことを信じて。

※報告の資料として「カンパネラ」誌に掲載された記事を、ご好意により転載させていただきました。